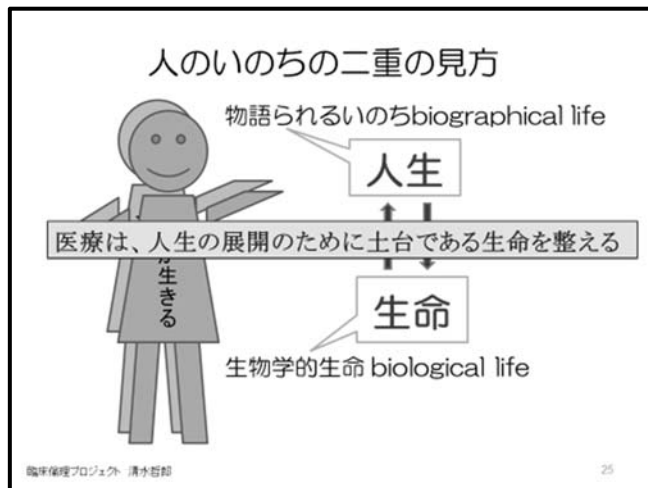


3. 人生と生命 —物語られるいのちと生物学的生命—

前章では、臨床現場で倫理的に適切な行為を結果する二つの要素のうち《倫理的姿勢》について概観しました。本章ではもう一つの要素である《状況把握》の側のもっとも基本的な部分を見て行きます。「相手にとって益となることを目指そう」という倫理的姿勢(与益)があっても、価値評価を含む状況把握「では何が相手にとって益か」が分からなければ、どうするのが適切かわかりません。そこで、ここでは医療においてもっとも基本的な価値観である「《いのち》をどう評価するか」を考えます。

《人生》も《生命》も英語では‘life’になるでしょう。でも、人生と生命では意味が違います。その違いを、『物語られるいのち』と『生物学的生命』と呼んで区別します。医学的に人間の身体に介入して、本人の最善を目指す際に、この二つの見方の違いを理解しておく必要があります。ここから「ある医学的介入をすれば延命効果が見込まれると医学的に判断される場合は、いつもそれを実行すべきなのか？」という問いに答えることができるようになります。



■人生＝物語られるいのち

《人生》は物語られるものです。ある人の《人生》は物語りとして言及されます。そもそも、物語られてこそ《人生》なのです。

私たちは自分の人生を、「これまでどのように生きてきたか」、「今何をしているか」、そして「これからどうしたいか」という物語りとして語ります。私はそのように語られた私の人生を生きつつある者として、周囲の人から理解されます。

人生の物語りは自分ひとりで創るものではありません。周囲の人々の物語りと交叉し、それらに支えられつつ形成されていきます。

■生命＝生物学的生命

人生と対比される《生命》は、身体的ないし生物学的な生命として把握されます。医療の場では、医療者が生物学を背景にした医学の理論を携えつつ、身体を調べ、身体に対して「医学的介入」をします。この時、医療者が働きかけている対象が『生物学的生命』です。

■《人生》の展開のために、医療は土台である《生命》を整える

『物語られるいのち』は、『生物学的生命』を土台として、その上に成り立っています。この身体に『生物学的生命』があり続けているからこそ、私は人生の物語りを紡ぎつつ、このいのちを生きることができるのです。ということは、私の人生(の物語り)がより豊かにな

【コラム】 「いのち」「生命」の文法

・「私は生きている」 ↔ 「私にはいのちがある」

A氏の身体を診察した上での医師の発言：

・「彼は生きている」 ↔ 「彼には生命がある」

→ 「いのち」「生命」は

「Xは生きている」を「XにはYがある」と言い換える時に、「Y」に該当する名詞として導入されたもの

り、より広がっていくことに価値があるからこそ、『生物学的生命』が続くことはよいことだと評価されるのです。つまり、『物語られるいのち』は『生物学的生命』の価値の源なのです。

☆ QOL (quality of life / 生活の質) は、物語られるいのち(人生)についての評価です。これは、本人が現在の生を生きた結果どれほど満足しているかの評価であるといえます(結果としてのQOL)。ただし、医療・介護をはじめとして、人々のQOLを高め、あるいは保持しようとする活動においては、人の現在の生が一般にどのような状態であれば(結果としてのQOL)が高くなるかを検討し、QOLに影響する要因を見出しています。そこで、QOLを高め、保持しようとする際には、その要因がどういう状況であるかを見て、結果としてのQOLを推定しています。このようにQOLを見ている時には、QOLのポテンシャルをできるだけ高く保とうとしています(ポテンシャルとしてのQOL)。

結果としてのQOLを左右する要因をもっとも一般的に言えば、「本人がどれほど自由であるか、ないし本人の人生の選択の幅がどれほど広がっているか」であり、この程度がポテンシャルとしてのQOLの評価であることとなります。